

京都大学	博士 (工 学)	氏名	杉山 真魚
論文題目	ウィリアム・モリスの生活芸術思想に関する建築論的研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>本論文は、19世紀後半の英国で活躍した装飾芸術家・社会主義者・詩人として知られるウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) の多岐にわたる活動に注目し、建築論的制作論の視点から、活動の複層性に通底する生活芸術思想の内実を解明し、生活を基盤とした建築制作のあり方を考察するとともに、モリスの制作に関わる諸概念の社会的、歴史的背景を伴った広がりについて検討し、生活芸術思想史の一端を明らかにした研究であり、6章からなっている。</p> <p>序章では、本論文の枠組に関する内容として、次の三点を提示している。①モリスの諸活動を「生活」概念の拡がりとともに時系列的に辿り、生活芸術思想の枠組を装飾芸術論、住まい論、社会主義論、書物論という四つの論点により形成している。②「生活芸術」の実現には〈芸術の生活化〉と〈生活の芸術化〉という二つの方法があり得ることを提示している。③モリスの自然探求および歴史探求を①の四つの論点に即して記述的に分析することを研究の方向性として定めている。</p> <p>第1章では、中産階級により営まれる「簡素な生活」に求められる〈芸術の生活化〉の方法を探ることを目指して、装飾芸術論のうち、とりわけパタンデザインの方法 (自然の問題) とゴシック芸術の方法 (歴史の問題) を明らかにしている。まず、ヴィクトリア朝の装飾芸術論の動向について、comfort 概念の意味の変容の事態、および功利主義、唯美主義、術学趣味、中世主義、国家主義という立場を確認している。装飾芸術における自然の問題として、パタンデザインにおける「コンベンショナルライジング」という抽象化作用を取り上げ、それが自然に存する生命の原理を日常生活において想起させることを目的とした制作行為であることを読み解いている。歴史の問題としては、モリスがゴシック建築を「生きているスタイル」と呼ぶことに注目し、それはモリスが制作者を静的に捉えず、伝統を持続、更新する「不断の生命」として捉えていることによると分析している。「伝統」の具体相として、建築や日常使用品の現在性を保持しながら「用と美」の結合を捉え直すことについて論じている。</p> <p>第2章では、「簡素な生活」に求められる〈生活の芸術化〉の方法への関心から、「家造り」と「庭作り」に関わる言説を通して、「住まい」という生活環境がいかにより制作されるかを明らかにしている。「工芸」なる概念が「用と美という二つの要素の統合」という意味において、「建築」と同義であることを確認した上で、「家造り」が「高尚な工芸」とされるのは、生命維持という「用」に関わり、「部屋」の構成において複合的な工芸の技術や他の工芸品の配置に関わるためであることを示している。次に、「庭作り」が人間生活の庇護に関わりつつ、人間の「秩序」と自然の「豊かさ」によって制作されること、「庭」の概念が「トランジション」という自然と人間の共生的関係を成立させる遷移的变化の場を示すものとして用いられることを解明している。これらをふまえて、モリスが「家造り」と「庭作り」の両者において自然と芸術の両義的性格を洞察する根拠を「喜び」の問題として解読し、「喜び」の感覚性が万物の動的事態に起因し、そこに観察と創造の連鎖的關係が見出されていることを論じている。</p>			

氏名	杉山真魚
----	------

第3章では〈生活の芸術化〉の方法について、自然資源や職人技術の問題とともに労働環境のあり方（「手工芸」と「工場」）という角度から探っている。芸術運動と社会主義運動の共通基盤としての「慎みある生活」の諸相を確認し、その初発として生産者と直接的に関わる生産行為と生産環境とが求められること、およびその関わりは人間存在の「気分」の二元性から把握されることを明らかにした上で、「手工芸」の方法とは、「デザイン」と「職人技術」を日常使用品において遂行することであるが、「職人技術」に人間の主体性回復の契機があり、その習得過程において「デザイン」への欲求が必然的に生じるという考え方を示している。さらに、「手工芸」の方法によって創出される「美しい環境」を取り上げ、生産環境の美化と生産手段の供給という二つの観点を検討し、生産環境と生産手段が人間生活の延長として把握されるのは、「大地」への眼差しによることを論じている。

第4章では、モリスが晩年に主題的に扱う書物の二重性（文学作品と視覚芸術作品）に着目し、〈芸術の生活化〉の方法を再度探求している。まず、モリス晩年の活動において書物論がアーツ・アンド・クラフツ運動の方向付けと関わっていることを示し、書物の文学作品かつ装飾芸術作品という性格をモリスの称揚する作品の特徴によって把握している。次に、「叙事詩的なもの」の枠組を「出来事」と「世界」という概念をめぐって明らかにしている。ここでは、モリスが諸物（自然物）および人間を内在的特性に基づいて「出来事」の連続的關係として把握し、そこに「世界の生命」という全体性を見出していることについて、中世の職人の世界観とモリスの宗教観に即して考察している。また、「装飾的なもの」の枠組についても、形態、構成、伝承の三側面を示している。これらの考察をふまえて、「叙事詩的なもの」と「装飾的なもの」の同一構造として「自然への愛」と「ロマンティックな特質」が関わることを明らかにし、さらにその見解をモリスのユートピアン・ロマンスと呼ばれる文学作品において確認している。

結章では、本論文で得られた成果を要約し、モリスの生活芸術思想の構造を定式化している。さらに、モリスの生活芸術思想における倫理的内容を整理し、その倫理性に依拠する制作のあり方を提示するとともに、それが現代の生活環境や地球環境の問題に反省的視座を与える可能性を論じている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、建築論的制作論の視点から、19世紀後半に英国で活躍した装飾芸術家・社会主義者・詩人として知られるウィリアム・モリスの多岐にわたる活動の複層性に通底する「生活芸術思想」の内実を明らかにし、生活を基盤とした建築制作の可能性を探求したものであり、得られた主な成果は次のとおりである。

1. 制作という観点から、モリスの諸活動を時系列的に辿り、生活芸術思想の枠組が装飾芸術論、住まい論、社会主義論、書物論という四つの論点により形成されること、「生活芸術」の実現には〈芸術の生活化〉と〈生活の芸術化〉という二つの方法があり得ることを示し、これらの枠組を用いてモリスの自然探求および歴史探求を記述・分析するという研究方法を提示した。

2. 上記の方法に基づいて、四つの論点について、モリスの生活芸術思想の構造を解明した。すなわち、①装飾芸術の源泉となる「自然」と「歴史」から「コンベンション」や「スタイル」の概念を抽出し、それらが静的な因習や様式を超えて、生活芸術に動的な「生命」をもたらすことを示した。②「家造り」と「庭作り」に関わる言説を通して、家と庭を含む「住まい」の構造を明らかにし、自然の作用と人間の制作に「喜び」を見出す生活環境の制作のあり方を明らかにした。③労働環境のあり方に注目し、「手工芸」に人間性回復の契機を認め、生産環境と生産手段を人間生活の延長として把握する「大地」への眼差しの重要性を指摘した。④書物という芸術に顕著に現れる「叙事性」と「装飾性」の不可分な関係に注目し、両者を「世界の生命」としての制作という視点から統一的に捉えるべきことを示した。

3. モリスの生活芸術思想における倫理的内容について考察し、生活芸術が〈芸術の生活化〉と〈生活の芸術化〉の同時実現の上に成立する必要があること、制作者と生活者に共有される世界観が求められること、制作と生活を包摂する人間の営為を「世界の生命」という全体性において捉える必要があることを明らかにした。

本論文は、建築論的制作論の視点からモリスの生活芸術思想を解読する方法を提示するとともに、その構造を解明したものであるが、近代的枠組とは異なる制作者と生活者の関係を含むモリスの生活芸術思想には、持続可能な環境や文明を創出する可能性が提示されており、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成23年2月8日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。